

「いのちと心を考える分科会」第6回分科会議事録

日時：2019年4月28日（日）13：30-16：00

場所：立正大学1号館第4会議室

出席：安藤、石井（スカイプ）、一ノ瀬、一ノ瀬、河野、田坂、豊田、藤原、松原、横山

1. 前回議事録の確認、今後のスケジュールについて確認が行われた。

2. 提言の体裁、目的、内容の整理について

- ・目次案について、提言は最後の2ページ程度なので、それに対して目次数が多いこと、全体として新書のようなのでエビデンスを示し提言につながるように圧縮する必要があるとの指摘があった。
- ・提言の目的は政策へコミットすることである。提言は万人向けではないが、誰に向けて書くのか、という点ははっきりさせておく必要がある。法制化に関わる人々、政策関係者、研究者等を念頭に置く。
- ・提言は専門家集団ではなく社会に向けて公開されるので、それにふさわしい表現で記述することは必要である。
- ・提言は、社会的に議論が分かれることについては、両論併記にする必要がある。本分科会の中でも2つの立場がありそうである。また、それは第2部とも異なる可能性がある。
- ・現在、見えている2つの立場、対立は、もう少しフェーズが異なることとして精密化できるので整理が必要である。

3. 提言の内容に関わること

- ・人間が作ったものではない人間、わからないことに手を入れてはいけないのではないか、ということについては生命科学の研究者でもそのように考える人がいる。
- ・エンハンスメントの想定として、例えば「効率主義に適合的な性質」と遺伝子改造を結びつけて議論をすると、「効率主義」的な形質と関連する遺伝子があるかのように誤読される恐れがある。その結果、優生学的な主張にありがちな、科学的根拠がない仮想的前提を追認し、さらに増幅する効果をもたらす恐れがあるため、こうした議論の立て方は避けた方がよいのではないか。
- ・一方で生命に対する介入は医療によって進んでおり、治療とエンハンスメントの境界線は見えづらい。またすでに、トランス・ヒューマニズムの人々のように人体改造をする人もでてきている。
- ・問題となっているのは、ゲノム編集をほどこした人を産み出してよいか、という点である。この問題は、70年代の試験管ベビーに始まり現在まで長く続いているが、ゲノム編集の特長は、一気に低コストで誰にでもできることになったことによる影響である。優生学の問題と強く接続する点がある。
- ・障害をもった人について、レオン・カスの世界観との対立をどう考えるかも重要である。
- ・発達障害は医療化されていく中で、線引きが難しくなっている。統合失調症も環境の影響が大きいがわかってきている。ダウン症はわかりやすいが、21番目の染色体だけ特別視して他の染色体異常は検討しないのもおかしい。
- ・功利主義以外の義務論も検討する必要があるだろう。
- ・ロボトミーの例や障害をなくす操作が行われてきたが、技術としてもうまくいくわけがない。ヨナス

の責任の倫理が参考になる。

- ・ 遺伝的つながりのある子でなければだめなのか、これから子供を産む世代の意識を聞きたい。

4. 今後の予定

- ・ 伝助による参加可能状況から、次回は6月16日（日）とする。
- ・ 日本学術会議から旅費を出すのは1.5回分とされているので、次回から科研費の分担研究者はそれぞれの分担金で旅費を支出していただきたい。科研費分担研究者でない委員の方については、日本学術会議の旅費の残額を確認して、不足が生じた場合には、科研費研究代表者の所属大学（立正大学）から支出する。
- ・ 海外の研究者の見解も聞く機会を作るために、国際ワークショップを科研研究会として実施したい。ついでには、一ノ瀬先生と石井先生とご相談しながら進めたい。
- ・ 次回はゲノム編集と生命倫理について、優生思想との関係も含めてご講演いただく。